

PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1998年5月 No.91

胎児を守る運動

パーシヤル・バース・アボーションについて

標題のパーシヤル・バース・アボーションについて、日本では現場の産婦人科のお医者さんのなかにも、一度も耳にしたことがない人がいるとのことです。この人工妊娠中絶の方法はアメリカではすでに行なわれており、それを禁止する法案が議会に提出されています。

パーシヤル・バース・アボーションとは、妊娠五か月、六か月の赤ん坊の足を引っ張って、無理やり赤ん坊を残しておいて、後頭部にはさみで穴をあけ、管を挿入して脳みそを吸い出して頭蓋骨を破壊するという、非常に残酷な中絶方法です。アメリカでは当初年間数百件だけという報告がなされていきました



高松司教 深堀 敏

が、実際には数千件も行なわれていることが判明しています。この中絶を禁止する法案が一九九六年と九七年に議会に提出されましたが、クリントン大統領が拒否権を使つて廃案にしようとしています。アメリカのカトリック司教協議会は、この拒否権行使に強く反対して抗議書を送りました。また世界各地のカトリック司教協議会にも、同大統領あてに抗議するよう要請しました。日本の司教協議会はそれに答えて一九九六年五月、常任司教委員会の名で抗議文を送りました。

以前は人工妊娠中絶でも、胎児が大きくなっていけば、早産のようにして母体外に出してしまいが、そつすると、胎児は生きたまま出てくるので、そして超未熟児を育てる技術が進歩しているため、そのような子どもを「人として育てる」ことができるようになったので、母体内でまず命を取つてから流産させるようになりました。また最近、欧米では、中絶のために母体内で引き裂かれる胎児（初期の中絶の場合）が痛みを感じてはかわいそうだからということ、まず胎児に麻酔をしたり、カリウム液を注射して命を取つておいてから中絶の手術をする傾向があるそうです。ひよつとするとこの線上にパーシヤル・バース・アボーションはあるのかもしれない。このように胎児にたいする残酷極まる殺人行為がすでに行なわれていると聞いて、平気でおれる人はいるのでしょいか。

わたしたちはいのちを守る技術の進歩の反面、あきらかに殺人行為と言ふべきものを、あたかも人間の自由と権利であるかのようにごり押しする者がいることを知ると、決してこれを稀な例外的処置として軽く見逃してはならないと思います。

まずわたしたちは、胎児は受精の瞬間から、絶対的な尊厳をそなえた一人の人間であることを、いつでもどこでも繰り返し主張しましょう。これは福音宣教の重要な、根本的なメッセージです。

人工妊娠中絶は「いのちの取り方」が問題なのではなく、「いのちを取る」ことが問題なのです。パーシヤル・バース・アボーションが非難されるのは、それが身の毛もよだつほどに残酷な方法だからというのではありません。すべての人工妊娠中絶が許しがたい罪悪行為なのです。

ですから胎児に麻酔をかけて痛くないようにしてからの中絶であれ、なんであれそれが人に許されないのは、人のいのちを正当な理由なしに取る方法だからです。

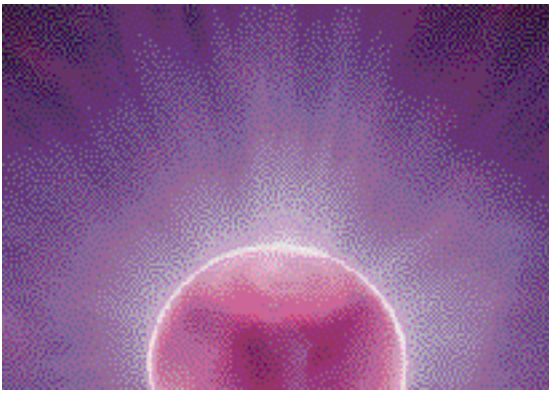
アメリカで行なわれていることは、やがて日本でも堂々とやる人が出てくるおそれがあります。わたしたちは胎児のいのちを守りぬくきびしい義務があるのでないでしょうか。



パースナル・バース・

アポーションの恐るべき犯罪

この妊娠中絶法は妊娠二期目か三期目の、子どもがすでに子宮の外でも生きて行くことが可能になった時期に行われることが多い。分娩が始まると、幼児は頭以外のすべてが外に出される。そこで医師は頭蓋骨の下の方からはさみを入れ、刃を広げて開いたところに管を通していく。そこから脳味噌を吸い取り、その後で頭の部分を取り出すのである。つまりパースナル・バース・アポーションは幼児殺しの新しい手段だといえるのである。



アメリカ、オハイオ州は一九九五年にこの中絶方法を禁止する法案を可決し、裁判所にも支持されている。今年に入ってからアメリカ議会もその禁止を二百八十六対百二十九で可決し、上院においても54対44で可決された。一九九六年三月二十七日にこの禁止法案はホワイトハウスの承認を得るまで行ったのだが、クリントン大統領は拒否権を發動すると発表したのである。

大統領の発言は、決断を改めるようにと求める全国規模のキャンペーンにまで発展した。大勢の生命擁護派達の中にはワシントンDCのジェームズ・ヒッキー枢機卿とボストンのバーナード・ロー枢機卿が二人の司教に付き添われてホワイトハウスの前をデモ行進しているのを目撃されている。シカゴのバーナディン枢機卿とロサンゼルス人のロジャー・マホニー枢機卿は、法案拒否を思いとどめるようにとのメッセージをクリントン大統領宛に送っている。けれども一九九六年四月十日に大統領領はパースナル・バース・アポーションを禁止する法案に拒否権を發動したのである。

「親愛なるクリントン大統領殿、あなたが四月十日に發動したパースナル・バース・アポーション禁止法案に対する拒否権を受けて、深い悲しみと落胆を感じながら申し上げます。

あなたの拒否権發動は、人間の命を神聖なものと考える私達にとつて理解を越えるものでありました。それは小さな幼児が子宮の外に出て初めの呼吸をしたその直後に彼らを殺してしまふという極悪非道な行為が今後も続くことを保証してしまったことになるからです。

拒否権發動の際にあなたは私達国民に向かつて「法案を拒否するしか選択肢がないのです。」と言いました。大統領殿、子ども達を、しかもほとんどこの世に姿を現しつつある子ども達を、パースナル・バース・アポーションによって残酷に殺してしまふことを認めるのかどうかの選択は、あなたにのみ託されていたのです。議会の両院ともきちんと選択をしました。パースナル・バース・アポーションに対してはつきり「ノー」と言つたのです。アメリカの女性有権者たちも姿勢を示しました。一九九六

年二月の世論調査では78%の女性有権者がパースナル・バース・アポーションに「ノー」と言っているのです。あなたの今回の選択は「イエス」と言うことによつて、中絶を継続させることよりもこの幼児殺しにも似た殺人を認めたことになるのです。

拒否権發動の際に大統領は議会に対して法案の一部を修正し、パースナル・バース・アポーションが母体の「深刻な健康上の理由から」行えるようにするよう命じました。更にあなたは議会がこの例外を法案に盛り込めば「これが一体何を指すかはだれにもわかるであろう。」と付け加えました。

大統領殿、そうではないのです。世界中のみんながみんな、裁判所が中絶問題を語る際の「健康」という定義が女性の全体的な「幸福」と実際に関わっているかどうかを理解しているわけではないのです。例をあげますと、結婚していないからという理由で中絶を行う女性を、「健康上の理由である」と法は見定めるのかどうか、ほとんどの人にはわからないでしょう。

同じように、女性が「若すぎるから」とか「年をとりすぎているから」といった理由、あるいは妊娠によつて感情的に混乱してしまつたり妊娠が学業や職業の妨げになるからという理由をも法は「健康上の理由をあげようとするのです。要するに、あなたも私達も気づいておられるとおり、健康上の例外は中絶オン・デマンドを意味するのです。

あなたは「健康上の」例外と「深刻な健康上の理由」には大きな違いがあると言いました。大統領殿、女性が若すぎるのと「深刻に」若すぎるのにはどんな違いが「法的に」あるのでしょうか。感情的に混乱するのと「深刻に」感情的に混乱するのにはどんな違いが「法的に」あるのでしょうか。この問題に関するあなたの調査からは、パースナル・バース・アポーションがただ純粹に任意の理由によつて行われていることが読みとれるはずで

拒否権發動の際に、女性の肉体的健康は子どもを完全に分娩することに守られるものであり、分娩を完全に済ます前に、想像を絶するような非人間的な方法で子どもを殺すことがどんな影響を母体に及ぼすかをきちんと説明できる医師が一人もいなかったことは興味深いことでした。事実、パースナル・バース・アポーションは女性の健康に危険を及ぼすのです。

ウォーレン・ハーン医師は最も広く医師の間で使われている中絶の教科書を書いていますが、パースナル・バース・アポーションに関しては、「これが最も安全な手段だ」という声明には断固と

して意義を唱える」と語っています。

大統領殿、あらゆる中絶はおなかの子どもにとって致命的であり、そして多くの場合、母体にとっても危険なことなのです。そしてこれは妊娠後期のパーシャル・バース・アポーションにとつて顕著であり、子どもは無惨な殺され方をし、母体は危険にさらされ、社会はそれを中絶の過程において傷つけられたと容認するのです。カトリック司教として、さらにはアメリカ国民として、パーシャル・バース・アポーション継続を望まれるあなたの拒否権に断固として反対し非難を続けます。

これからの数週間、数ヶ月、私達一人一人は自分達に出来るあらゆることをして人々にパーシャル・バース・アポーションについて語ってほしいと思います。パーシャル・バース・アポーションが今後も行われることになったのは大統領が法案を拒否したからだということを知らせていくつもりです。

更に私達はカトリック教徒や他の善意に満ちた人々に、それにはパーシャル・バース・アポーションに反対する自称「自由な選択」派の有権者65%も含まれますが、この恥ずべき拒否権を覆すよう、議会に働きかけるよう全力を尽くしてもらいます。

大統領殿、このたびのあなた

の行動は、子宮の内外で生存する無力な命の扱い方においてわが国を非常に危険なターニングポイントへと追いやることになるといえるでしょう。わが国を幼児殺し容認の方向へと一歩近づけることになるのです。国の高官がわが国を死の文化容認へと急速に追いやるのです。

ニューヨークのカーディナル・ジョン・オコナー枢機卿はこのパーシャル・バース・アポーションを「野蛮な行為であり、幼児殺しである。いかなる文明社会もこれを容認することがあってはいけません。」と語っています。ローマ法皇、ヨハネ・パウロ二世は「恥ずべき拒否権発動」を人間の命に対する「攻撃の中でも信じがたいほど残忍な行為である。」と語っています。

billings9/96p46

若者の立場でパーシャル・バース・アポーションを考える

ある日、教会を出る時に、パーシャル・バース・アポーションについてのパンフレットを見かけました。私はそれまで、その言葉を聞いた事がありませんでした。パンフレットを読んで、これは今まで見聞きした中でもっとも嫌悪すべき残酷な暴力ではないかと思いました。

ご存知ない方のために説明すると、パーシャル・バース・アポーションとは妊娠後期における「処置」で、普通妊娠6ヶ月から遅くとも7ヶ月半の間に行うものです。その方法は(気分の悪くなる方はここを飛ばして読んでください)、逆子で分娩し、真空吸引機を胎児の頭がい骨の後ろに挿入し、胎児の頭だけが母体の中に残っている状態にします。すると脳が吸い出され、頭が破裂して、胎児は死亡します。

れるんだと聞きたくありません。いい質問です、私もできるものならそれに答えてあげたい。

胎児は、この世の空気を吸うことなく殺されていくのです。これは中絶なんかではありません。残酷な殺人です!(ごめんなさい、忘れていました!中絶はすべて殺人でしたよね!)この方法で、赤ん坊が残酷に「殺される」時、母胎を出てほんの10センチほどしか動いていないのです。

どうも我が国の政府は、胎児に対しては二重標準を持っているようです。先日、米国北東部で、妊娠6ヶ月だった女性が撃たれる事件がありました。被害者は命をとりとめました。胎児は死んでしまいました。犯人は拘留所に入れられ、被害者の弁護士は胎児を殺した罪で起訴するそうです。すごいでしょう!

病院や医者、未熟児で生まれた子どもの命を守るために一生懸命手を尽くします。たくさん時間とお金をかけて、パーシャル・バース・アポーションをされる胎児よりもまだ早い未熟児を守ろうとします。ここに少しでも矛盾はないでしょうか?

彼らはこう主張します。中絶される胎児は、望まれない子どもなのだ。けれども、どこかで、誰かがその子を望んでいて、自分の家に喜んで迎え入れ、まるで自分の子どものように愛してくれるはずなんです。

だから、中絶は間違った行為なのです!神様は、私達が傷ついたり、殺されたりすることを望んでいないのと同様に、尊い小さな命達にこのようなことが起こるのを望んでおられません。私達は、医者がいつかこのような暴力的な行為が神への冒瀆であると気づいてくれるよう祈らなければなりません。祈りとほどこし、そして断食によってのみ、無垢な命達に起こっている事を人々に気づかせることができるのです。

キャロリン・チャイルダーズ

母親への敬意

一九一四年議会は歴史的な決議を通過させた：

『アメリカ合衆国への母親達の貢献がこの国の力と賞賛の大きな源となつてゐること、そして国家を築いたものとして家庭の存在を強調する際に自分達やアメリカの母親達に敬意を表すこと、さらにはアメリカの母親達が良き政府と人類のために尽くしてくれてゐること、以上のことから今後五月の第二日曜日を母の日として祝つことを宣言する。』

この決議案の根底にあるのは、旧約・新約両聖書に記されてゐる母親に対する深い敬意の念であつた。戒律には「父と母を敬え。」(脱出の書 一十：12)と記されてゐる。そしてこの命令はエフェソ人への手紙 六：2においても繰り返し述べられてゐる。

はここでなぜ神が母親を敬うようにとおっしゃつてゐるのかをもう一度思い起こしたいと思つ。

まず最初に、イエス・キリストは母親のことを敬つてゐた。十字架にかけられながらもイエスは自分の母親のことを気づかつてゐたのである。(ヨハネによる福音書 十九：26～27) それより以前に、聖母マリアは神が自分に与えてくださった敬意に感謝してゐた。「卑しいはしたために御目をとめられたからです。…全能者が私に偉大なことをされたのです。」(ルカによる福音書 一：48～49)

さらに、母親は(父親と共に)子どもにとっては神のような存在なのである。確かに神の性質のある部分は父親よりも母親の方により反映されてゐる。慈悲深さや愛情や優しさといった神の「女性的特性」は、多くの場合、父親よりも母親によつて表現されるものなのである。

聖書で、神は自分がある母親と比較してひるむようなどころはない。例えば、イザヤの書 四十九：15には「女が乳のみ子を、母がふところの子を忘れようか。

よし、忘れるような者があつても、私は忘れない。」と記されてゐる。

神の化身であるイエスは、自分のイスラエルに対する情熱をめぐりとひなの関係になぞらえてゐる(ルカによる福音書 十三：34)。勇敢なキリストの弟子パウロでさえ、彼の若い改宗者達に対する扱い方を子どもを育てる母親の愛情になぞらえてゐる(テサロニケ人への第一の手紙 二：7～8)。

人間の母親は神のイメージを反映してゐる。つまり母親は、神の性質の重要な側面を子どもに示してゐるのである。私達はだからこそ母親に敬意を払わなければいけないのである。特に母親は子どもへの影響力が大きく、それがいざれ将来の家族や教会や国にまで及ぶことも考えられる。聖書には、子どもや世界に影響する母親の力を表す例えが、よきにしろあしきにしろたくさん書かれてゐる。

例えばユニーニスは、不信仰者と結婚したが、自分の息子は信仰のもとに育て、聖書の教えで彼を教育した。息子のティモシーはパウロの弟子となり、アジア各地に教会を建てた。その一方でユダの王オホジヤは「主の目の前に悪を行った」。なぜか？それは「その母」アタリヤが「彼の相談相手となつて悪を行わ

せたからである。」(歴代の書下 二十二：1～4)

このように、母親には子どもの性格や行動に及ぼす強い影響力がある。ある世代の家庭の習慣がいずれは社会の道徳につながるのである。古いことわざにもあるように、「揺りかごを揺らす手は世界を支配する」のである。

子どもを育てるといふ犠牲的な労働に対しても母親達は尊敬されるべきである。恐らく母親以外の職業でこれほど無私無欲で忍耐力を要するものはないは

聖母マリアの話

『聖母マリアはわたしたちの魂が受胎の瞬間から存在することを教えて下さいませ』

一八五八年、ベルナデッタ・スビルーは14才でした。彼女の家庭は貧しく、定収入さえないといつた有様でした。自分たちの住む家すらなく、使用されてゐない空屋に住み着いてゐたのです。彼女には教育らしい教育もなく、人々からは、知能も低いのではないかとさえ思われてゐました。健康にもそれほど恵まれ

ずである。本当の意味において母親はキリストの愛情を映し出しているのである。イエスが教会のために自分の命を捧げたのと同じように、母親は子どものために自分の命を犠牲にするのである。家庭においては奉仕者である母親は、神の目には何にも増して偉大な存在と与るであらう。

労働と愛情で家庭に安心感を与えてくれ、それを健全な社会へと向かわせてくれる母親に、私達が最低限できることは、感謝と敬意の気持ちを書くことである。

デービッド・ウオーガン

てはいませんでした。家族のためににながしかの収入を得るために、羊飼いの仕事などをしてゐました。

その年の2月11日、ベルナデッタは妹と友達を伴つて、ルルドの郊外にあるマッサピエルという場所に、たきぎ拾いに行きました。そして、そこである貴婦人に出会つたと言つてゐます。その方は、身の丈もある白いドレスを着ておられ、青い帯をしていらつしやいました。そして頭にはベールを被つておられました。そのとき、ベルナデッタと一緒に

ほかの子ども達は、離れた場所
にいたので、貴婦人を見ていま
せんでした。

2月27日のこと、その貴婦人
は、再び御出現になり、マツサビ
エルと呼ばれていたその地に聖
堂を建立するようという、主
任司祭への伝言を、彼女に託さ
れました。ですから、ベルナデッ
タは早速ペイラマル神父の所に
赴き、貴婦人の依頼について話
しました。神父は困ってしまい、
ベルナデッタに、その貴婦人の
名前を聞いてくるよう言いつけ
たものです。

3月25日、ベルナデッタは、
マツサビエルの洞くつで跪いて
祈っていました。彼女が祈って
いたそのとき、貴婦人が御出現
されました。ベルナデッタは、そ
の貴婦人のお名前を聞いてくる
ようという主任司祭の依頼を
思い出したので、お名前を聞い
たところ、「わたしは無原罪の宿
りです」というお答えをいただ
きました。

旧約時代に、神はご自分の民
への緊急な伝言を伝えるために、
時として天使をお遣わしになり
ました。新訳時代の今、神は聖母
マリアを遣わされます。一八五
八年という時点で、何がそんな
に緊急だったから、「無原罪の宿
り」という称号で、マリア様がご
出現なさったのでしょうか。そ
の4年前、教皇ピオ九世は、この
昔からの教えを、正式に決定な

さっていました。

『わたしたち、教会は、聖にし
て不可分の聖三位一体の栄光、
また聖なる乙女マリアの名誉、
カトリックの信仰とキリスト教
の発展のために...全能の神の
特別な恵みと特権によって、か
つ人類の救い主イエスの功徳を
先取りして、聖なる乙女マリア
を、その御宿りの最初の瞬間か
ら、全ての罪の汚れから免れて
おられたとする教義が、神から
啓示されていること、そして、そ
のために全てのキリスト信者か
ら確固として、また、常に信じら
れなければならぬことを、こ
こにはつきりと発表、宣言しま
す。』

それ以来の4年間、19世紀半
ばの世論形成リーダーであった
知識階級のエリートたちは、こ
の不可謬の宣言を無視し続けて
いたので。彼らの考え方の中
には、原罪の教えの存在する余
地がなかったのです。大衆を脇
道にそらせてしまう危険ははな
はだしく大きかったと言えるで
しょう。

マリア様はご自分の子ども達に
真理を教えるためにいらっしや
いました。完全無欠の母親の愛
でもって、マリア様はご自分の
子ども達に、それがどれほど真
実であるかを教えて下さいまし
た。マリア様の取り次ぎの力に
信頼してそこを訪れる人達に、
マリア様はたくさんのお恵みを下

完璧な母

(母は自分に可能な限りのことを行い、それ
以外のことはすべて神に委ねたのだった。)

母は私のことを特別に愛して
くれた。母が私をどれだけ愛し
てくれたか、見方によっては私
の四人の兄弟よりもまたは五人
の連れ子たちよりも大切に思っ

さいました。これらの恵みと奇
跡は、マリア様には、神でいらっ
しやるその御子に対して、確か
な影響力があることを証してい
るではありませんか。私達が、
もし、これに同意しないとすれ
ば、その意味は、この教義が間違
いであり、ルルドで起こる全て
の印と奇跡が偽物であると主張
することになってしまいます。

無原罪のマリア様、受胎の最
初の瞬間から生命が聖である
という信仰を、私達の間により
えらせて下さい。人工妊娠中絶
がなくなるよう祈って下さい。
そして生命を賜物として尊敬す
ることをあなたの全ての子ども
達に教えて下さい。

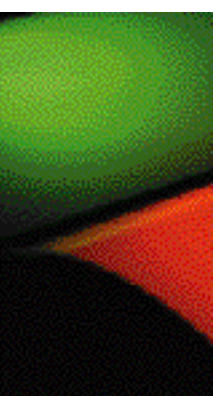
てくれていたように思う。私が
まだおなかにいる頃、母は結核
を患っていた。医者は母に中絶
を勧めたが、母は拒否した。当時
結核は不治の病であり、母は自
分が死んでいくのを知っていた
のである。中絶していればあと
数ヶ月あるいは数年は長く生き
られたかもしれないのに。母は
おなかの中にいる子どもに生き
るチャンスを与えようと決心し、
わが身を犠牲にすることが無駄
に終わらないことを祈った。父
は家の近くに小さな小屋を建て、
母が近くにいなながらも他の家族
に病気を移さないようにした。

父は農夫だったので朝は早く
家を出た。母の代わりに家事を
こなさなければならなかったが、
農場経営も怠ることはできな
かった。父はトラクターの後ろ
に箱を作って作業中に私が乗れ
るようにした。おそらく五歳で
トラクターに乗った時間におい
ては世界記録を保持できるので
はないかと思えるほどだった！
私の中には母との直接の思い

出は二つか三つしかない。あと
は聞かされた話のみである。あ
る夜、悪夢を見たのを私は鮮明
に覚えている。ところがすぐに
目がさめて、それが実際に起
こっていることに気づいたの
だった！父が私を小屋のドアま
で連れて行き、私はそこで母を
見ることが出来、母も私を見る
ことができるはずだった。でも、
私は母のところに行けなかった。
兄や姉達は朝起きて仕事に就
いたり学校へ行ったりしていた
が、私はひたすら寝ていた。母が
寝室の窓から天使のように私を
見ていてくれると聞かされたか
らである。例えば私のそばまで
やってきて触れてくれることは
なくても。

母は、私が二歳九ヶ月になる
までしか生きられなかったが、
当時の母に可能な限りのチャン
スを私に与えてくれた。本人は
母親として失格だと感じていた
かもしれないが、母は自分に可
能な限りのことをしてくれ、あ
とはすべて神の手に委ねたので
ある。それが聖書における完璧
という定義に当てはまると私は
信じている。

フアン・ピエアンソン



私達の苦しみ をわかって



私が主任として勤務している妊娠ケア・センターへの道のりは楽しいものだった。郊外にある自宅から勤務先の街中までの道すがら車からの眺めはすばらしい。

春になり、何もかもが生命の息吹を感じさせる。冬の間まる坊主だった木々も、いまや緑であふれんばかりだし、ライラックの花が咲き、小鳥がさえずっている。

私は困った立場にあつて非常に難しい決断に迫られているたくさんの患者さんをサポートするため、毎日意欲的に仕事に取り組んでいる。私のセンターでも、アメリカ国内のほかの妊娠

ケア・センターと同じく、妊娠テスト、カウンセリング、母子家庭サポート・システム、中絶後カウンセリングなどを行っている。ここでは子どもばかりでなく母親に対するケアも怠らない。母親である女性達に、妊娠に際しての最終的な決断をするまでに、すべての事実を理解してもらうことが大変重要だからである。しかし、このとある春の日、私は患者ではなく、ボランティアの人の面接をすることになつて

いた。仮にこのボランティアの女性をジェーンと呼ぶ事にする。彼女が十八歳の時に中絶をした事は前もって本人から聞いていた。彼女は中絶が与えた精神的、身体的苦痛から立ち直れないでいたので、自分の中絶の事はあまり人に話した事はないようであった。

その美しい春の日に、ジェーンが私のオフィスにやってきた時、彼女の目は前日眠れなかつたかのようにどんよりとしていた。「どうなさったの?」と聞くと、彼女の唇は震えはじめ、目には涙があふれはじめた。

涙をこらえるため少しの間気持を静めた後、彼女は話しはじめた。「十八年前の同じ週末、中絶をしたんです。その事がどうしても頭から離れません。中

絶の事が忘れられなく、絶えずつきまとうてきました。私が中絶した赤ちゃんは男の子だったのか女の子だったのか、どんな顔をしていただろうかといつも考えるんです。」彼女は唇をかんだ。「子どもを中絶する前に、私を助けてくれる誰かがあの時いたらと思います。」と彼女は言った。私は彼女の手を静かになてた。「赤ん坊の生命を取り戻すことは出来ません。でも、せめてほかの同じように悩んでいる女性の助けになりたいのです。」

私はファイルからジェーンがセンターに宛てた手紙を取り出した。ジェーンの了解の上、ここにその手紙を紹介したいと思う。私が十八の時でした。私は無知な子どもで、望まない妊娠なんて自分に起こるはずもないと思っていました。どうしてこんなにも愚かだったんでしょう。

真夏のある日、私はふと生理が遅れていることに気付いたのです。婦人科の予約をとり、誰にも言わずに尿のサンプルを持って診察を受けに行きました。検査の結果、妊娠していると聞かれました。医師は、中絶についてアドバイスしてくれました。おそらく、私の年齢と未婚であるという事実からして、当然私の中絶を希望しているものと思つたのでしよう。私は妊娠している事でショックを受けたのと、

恥ずかしいのとで、普通の妊婦に与えられる診察を願い出る事が出来ませんでした。医師は、ピッツバーグにある中絶クリニックの電話番号をくれ、手遅れにならないうちに早めに中絶を決めたほうがいいと言いました。

数日後、私は母に妊娠の事を告げました。母が最初に言った言葉は「子どもを産むなんて無理ですよ」でした。これを聞いて、打ちのめされた気分になりましたが、またしても恥ずかしさのあまり、子どもを産みたいとは言い出せませんでした。私が母に医者に教えてもらったことを話すと、母はそのクリニックスに電話して中絶の手続きをとるようにと言いました。

両親は、中絶手術の日ピッツバーグまで車で私を連れて行きました。電話で予約した時に、手術前にカウンセリングがあると教えられました。中絶処置について説明してくれたカウンセラーは女性でした。彼女は説明の時に「ちよつとした腹痛」とか「受胎物」などの言葉を使っていました。私の体の中で赤ん坊が成長しているなんて、誰も教えてくれませんでした。誰か私はどうしたいのか尋ねてくれる人がいたらとむしよりに思っていたのに、誰も私の意見を聞こうという人はいませんでした。依

然として、私は恥ずかしくて、中絶したいかどうかわからないと誰にも言えなかつたのです。

手術は不快で苦痛を伴いました。処置が終わると待合室に連れていかれ、飲み物とクッキーを出されて、ピルのトライアル・パックを無料でもらいました。

家に帰る時の事は覚えていません。ただ思い出すのは、その夜、自分の部屋で一人きりでひどく泣いた事です。のどに大きくなかたまりがつかえて、どうやっても飲み下せないかのようでした。これほどの喪失感を味わつた事は、かつてありません。中絶したという罪の意識は、私の中から消える事がありませんでした。中絶後は誰にも、親や兄弟や友人にさえ心を聞くことができなくなりました。もしこの事を誰かに話したら、きつと嫌われる、中絶したなんて信じられないと思われるに決まっていますと思いました。

いつか中絶のことは忘れてしまい、ある日偶然に中絶に関するニュースを聞いたり記事を目にして、何日かは落ちこんだりするだろうなと思つたりしました。しかし、こんな気分でした。自分は何をしたか本当にはわかっていなかったからなのでした。というのは、三年ほど前(中絶から十五年後)に中絶とは何かを初めて知つたからです。

日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

「中絶に反対する運動」

〒780-0062 高知市新本町一丁目7-31

電話 / Fax 0888-73-3619 e-mail: nvt56n@ps.inforyoma.or.jp

会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円
一万円 五千円 一千円

無料: 毎月プロ・ライフ・ニュースレター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さい命を大切に育みましょう。

事務所時間:

月一金 09:00-12:00 & 13:00-18:00
日のみ 13:00-17:00
土曜日 09:00-12:00 & 13:00-15:00

御送金

銀行: 四国銀行朝倉支店
口座番号: 0573553
日本プロ・ライフ・ムーブメント
郵便局: 「郵便振替」
現在口座番号: 01660-5-39607
日本プロ・ライフ・ムーブメント

事務所便り

おかあさんがしごとについているから
学校からかえって「ただいま」といっても
だれもこたえてくれない
でもわたしのこころの中に
おかあさんがいるから
へんじをしてくれる

今月は母の日を迎えます。この詩は鹿島和夫先生が編集した「耳に貝をあてると海の音」の本に、当時小学一年生のよしはら きよみちゃん
が書いた詩です。働きに行っているお母さんと
子どもの強い絆がよく現れていると思いませんか。
か。そして、この詩はもっと広い意味で、私達皆
に語りかけてくるように感じます。どんなに大
きく成長しても、どんなに距離的に遠く離れて
いても、お母さんを心を感じる時、落ち着い
て、安心していられる。一人一人に「お母さんが
いる」ことは当り前のことだけれど、そんなお母
さんがいることは私達には恵みであり、いやし
の力となっていると感じます。お母さんの存在
は本当に偉大。ありきたりの言葉になつてしま
う恐れがあるけれど、やはり「お母さん、ありが
と！」の言葉を今一番送りたいと思います。

さて、この前から新聞誌上を賑わしていたピ
ルの件について心配していましたが、三月三日
の読売新聞で「ピル」解禁大幅に先送り・排出
物の安全性検討の記事が掲載されていました。
ご覧になった方もおられるでしょう。読まれて
いない方のために抜粋すると次のようになって
いました。「…厚生省の中央薬事審議会常任部会
は二日、ピルの服用者が排出する合成ホルモン
が生態系に及ぼす影響などを検討したうえで、
最終判断を下すことをきめた。…合成ホルモン
について、市民団体などが環境に悪影響を及ぼ
す恐れがあると指摘している。」

日本プロ・ライフ・ムーブメント

その頃、私は妊娠ケア・センターでボラ
ンティアとして働くべくカウンセリン
グコースを取っていました。そのコー
スで初めて、中絶処置の真実を学びま
した。私が葬り去ったのは「受胎物」で
はなく、れっきとした赤ん坊だったの
です。心臓が鼓動している赤ん坊を切
り刻んで死にいたらしめたのです。

カウンセラーになって三年たちまし
た。予期しない妊娠に悩む女性がどう
して私のもとにやって来るか私にはわ
かりません。私が彼女達に望むことは、決
断する前にすべての事実を知っておい
て欲しいということです。中絶だけが
唯一の解決策ではなく、サポートシス
テムも用意されている事、そして何よ
りも神が愛して下さっているという事
を。神は私達の罪を許し、傷をいやして
下さいます。なぜなら、これは神が実際
に私にして下さった事であり、それゆ
え今私は神のメッセージを伝える仕事
をしているのです。

以上がジェーンの物語である。しか
し私は、同じような話を何人もの中絶
した女性達から繰り返し聞いてきた。

ジェーンは、事実を知らされる事な
く、子どもの死を判断しなければなら
なかった。赤ん坊の小さな心臓は、受胎
二十四日後から動いていた事、その脳
波は受胎六週間で観測できる事、胎児
も痛みを感じるのだという事等も知
らなかつたのである。受胎直後から既
にすべての遺伝子が伝達されており、
赤ん坊にはただ成長のための栄養と時
間だけが必要なのだという事をもし
ジェーンが知っていたならば、事態は変

わっていたのではないだろうか。
一般に子どもが死んだと聞くと、世
間の同情は子どもに向けられる。しか
しながら一方で、毎日四千人を超える
赤ん坊が合法的な中絶によって殺され
ている。法律では、母親の体は母親だ
けのもので、母親だけに選択する権利
が許されているからだ。

変わった意味

celebrate13-4/97p16-7

私はこの沈黙の叫びのビデオを授業
で見るまで「中絶」ということはお腹
に宿っている赤ちゃんにとつても、ま
た母親である女性にとつても今の幸せ
を維持していくためにはしよつたこと
だと思っていました。しかしこの
ビデオをみて衝撃を受けました。「中
絶」は「しよつたこと」なのでは
なく「殺人」なのです。それも自らの
血を分けた愛すべき我が子を。周りを
みわたしてみても自分の子をかかわい
がらない親はいません。そんな愛する我
が子を自らのお腹の中で殺してしま
う。その人は人間として、ヒトとして
一番大切な部分である「心」を失つて
しまった人なのだろうと思います。
私はこのビデオを見ることで、「中
絶」という衝撃的な場面に出会い非常
にショックを受けましたが、それ以上
に人として大切なことを学んだよう
な気がします。

T・Tさん(高校生)